

第11回 三賢人に今こそ学ぶ

I T 生

東日本大震災以降、「防災はいかにあるべきか」を取材するなかで、考察を進めてきた人物が3人いる。企業家、甲南学園創立者で文部大臣を務め、昭和13年の阪神大水害の際に「常二備へヨ」の格言を残した平生飢三郎、東京大の地震学教授で関東大震災や昭和初期の南海トラフ地震を予言した今村明恒、その同僚で、「天災は忘れたころにやってくる」で知られる物理学者、寺田寅彦である。

3人の生きた時代は、1866年～1948年つまり、明治維新の前後から昭和の終戦直後にかけてである。3人が幼少期から青年期を迎えた時代の日本は、司馬遼太郎の言葉を借りれば、「まことに小さな国が開化期をむかえようとしている」（坂の上の雲）時期であった。そうした中で、3人が生を受けた武家社会は、明治維新までは日本の知識階級として社会の中核を担ったが、維新とともに「失業、した。

が、たちまち食い扶持を失った武家の子弟はこぞって「学問」にいそしんだ。「学問」は、そのまま近代国家の体裁をなすために必要とされたからだ。このことは、「坂の上の雲」でこう表現されている。

—「貧乏がいやなら、勉強をおし」という。これが、この時代の流行の精神であった。学問さえできれば、国家が雇傭（こよう）するというのである—。

3人はこのような時代の空気にもまれ育ち、のちにその言動が国家を左右する立場にたつにいたる。であるから、3人はともに、亡くなる瞬間まで全身全霊を、国の有りようがより良い方向に進むよう捧げた。

なかでも、今村明恒は、日本の地震学史上はじめて実証的予知研究を手掛けるにあたり、私財を投じ、和歌山を中心として東海、紀伊半島、四国一体に観測網を構築した。南海トラフでの地震の発生を懸念していたためであったが、この時期の日本は、大東亜戦争に突入し始めていた時期でもあり、国の支援はほとんど得られなかったのだ。

投じた私財は、当時「地震の神様」と賞された人気研究者としての原稿料、講演料などで、庶民の住宅100軒分に相当するものだったという。果たして、予言どおりに、昭和19年、21年と相次いで、東南海、南海地震が起こった。しかし当時は、敗戦色濃い戦争末期と焼土と化した終戦直後である。その混乱期の陰にかくされてしまった今村の努力はかえりみられることはなかった。平生、寺田のふたりも同様である。



今も和歌山市の郊外に残る今村明恒氏の私設観測所。現在は東京大地震研究所の所管となっている

そして、3人が生きた明治から昭和初期の70年間の教訓を学び損なったわれわれは、ちょうど戦後70年間で、災害（都市直下地震、津波地震）に対して同じ失敗を繰り返した。同じ失敗を繰り返すということは、われわれの生きる日本はそういう国土なのだ、ということをして3人は死力を尽くしていわんとしたのだ。次の70年は果たして、3人の建国の精神に学べるのだろうか。

（平成28年3月）